

勝田吉太郎著「時流を読む - “爛熟”民主主義の衰退 - 」

じゅん刊「世界と日本」内外ニュース 2010年2月15日刊を読む

- 1 . プラトンによる没落前夜の民主主義社会の状況に関する記述を離れて、実際に見られたギリシャ、なかんずく、その中心地であったアテネ民主主義の爛熟<sup>らんじゅく</sup>と劣化の様相を、できる限り簡潔に書いてみよう。
- 2 . さて、ギリシャ(アテネ)の民主主義といえば、誰しもすぐ想起するのは、歴史家トゥキジデースの『戦史』も記された、大政治家ペリクレスによる「ペロポネソス戦争戦死者告別式」における雄弁な民主主義の賛美であろう。
- 3 . だが、それは民主主義の理想についての美辞麗句であるにせよ、現実はずしも麗わしいものではなかった。はやくも、民衆(デモス)の欲望が国家を食いものにしつつあったのだ。ペリクレス自身にしても、いつなんどき、あの忌まわしい「陶片追放」の犠牲になるやも知れぬ、とひそかに危惧<sup>きぐ</sup>していた。民衆は次々と、自分たちの欲望を満たそうとしない政治家たちを葬り去っていったのである。
- 4 . では、デモスの欲望とは、どのようなものだったのか。
- 5 . - アテネ民主主義は、もともと市民権をもつ少数の民衆の、いわば“手弁当”によって、行政も司法も、むろん立法もなされていた。だが、奴隷をもつ市民といっても、みながみな富者ではない(現にソクラテスは、決して富裕層ではなかった)。
- 6 . そこで、比較的貧しい市民層がまず「裁判官手当」の国家支給を求めた。プラトンによると、かのペリクレスが、この民衆の欲望に応じて国家支給を始めた張本人であった。それが悪しき前例となり、次々とさまざまな市民の要求に応じて、国家支出がなされるようになる。
- 7 . ペリクレス死去後ともなると、凡庸な民主主義の政治家たちは、ついに民衆の欲求のまま、「テオリコン」と呼ばれる観覧費を支出し、増加させていった。つまり観劇の費用、屋外劇場建設の費用、その劇で演じる役者たちのギャラも、すべて国家もちとなった。はては、遠路アテネの劇場へ来る市民たちの宿泊費まで、国民の支出で賄ったといわれている。
- 8 . このようなことをしていたら、国家財政が赤字になるのは必定。おまけに、折しもギリシャの覇権をめぐるペロポネソス戦争の最中のことである。

- 9 . アテネは海軍国であったが、民衆に迎合する政治家たちはなんと戦艦費を流用して「テオリコン」費をひたすら増加させていった。
- 10 . こんなことをしているなら、戦争に敗北するのは当然の成り行き。結局 BC404 年、アテネはスパルタに降伏した。敗戦後、政権交代など政治的混迷の一時期が続いた。この過程でソクラテスは、復活して、権力の座に就いた民主主義の政権の下で、死刑を宣告されたのだった。
- 11 . ソクラテスを心から敬愛していたプラトンが、民主主義に対して厳しい判定を下したのは、当然のことでもあろう。彼は民主主義の末期症状をつぶさに目撃し、体験していたのだった。
- 12 . 敗戦後のアテネは、デロス同盟の指導国、覇権国たることをやめ、ひたすら“平和国家”に終始した。その結果であろう、次第に“経済大国”化していった。
- 13 . それに応じて、再び民衆の欲望が台頭し、またもや「テオリコン」費の増加が見られるようになった。今では軍事費も「テオリコン」費に当てられる始末。こうして「パンとサーカスを」の政策は、すでにアテネで最初に見られるようになったのである。
- 14 . むろん、国家の将来を真剣に思う政治家がいなかったわけではない。デマステネスも、その一人であった。だが、なんと、市民たちは民会において、「テオリコンの費用の一部を軍事費に充てよ」と提案する政治家は「死刑」に処す、という決議を通す有り様。こうなると、民主主義の末期症状どころか、“野たれ死する”寸前の光景であろう。
- 15 . 民衆が人生の一切の快適と快樂費用を、国家に背負わせて平和を享受していた折しも、ついに憂国の士たちが危惧していた事態が発生した。北方に強大な武力をそなえた国が出現したのである。フィリポス王のマケドニアである。
- 16 . 王は“平和ボケ”したアテネに、軍門に下るようにと要求した。さらに市民たちは、祖先たちのペルシャの大軍と戦った勇敢さを思い、負けると知りつつ BC338 年にカイロネイアの野で一戦をまじえ、そして惨敗し、国の独立を失った。ちなみにフィリポス王は、その後暗殺されたものの、その息子こそは軍事的天才なるアレクサンドロス大王であった。
- 17 . ところで、アテネはじめギリシャのポリスは、民衆の快樂の費用(テオリコン費)をどう賄ったのだろうか。
- 18 . まず富裕層に、ありとあらゆる名目で高い税金を課した。金持ちの奴隷や外国人に市民権を高価に売りさばいた。だが、最終的には、インフレ政策に訴えた。

19. つまり、食糧はじめ多くの輸入品に法外な税金をかけ、それをアテネ政府に納入させたのである。むろんそうなれば、物価の高騰は自然の成り行きである。ギリシャの“物欲民主主義”が自滅していく過程に見られたもの、それはとめどないインフレであった。これもまた、われわれ現代人にとって意味深長ではないか。

20. 周知のように、今日の日本は、800兆円にのぼる赤字国債をかかえている。その上、3兆円規模にのぼる交付金を、国民の大半にクーポン券ないし現金で与えようとしている。近未来に、よほど高額な税金を国民各層に負担させないなら、やがて政府は、安易なインフレ政策を訴えるのではないか。

21. すでに、150年も前に『ギリシャ文化史』を書いたブルクハルトは、短く、こう述べて、警告している。

「この国家は、甚だ気まぐれで欲深いデモスの手中に落ちてしまった。…だが、われわれはこのポリスを断罪することができるだろうか。…なぜならば、われわれも進歩の名において、来るべき幾世代に莫大な負債を背負わせ、“未来”を拘束しているからである」と。(詳細は、拙著『勝田吉太郎著作集』第8巻『民主主義の幻想』を参照されたい)。

平成 21 年 1 月 5 日

P30 ~ 36

#### [コメント]

日本では昨年初秋の総選挙で、自由民主党・公明党の連立政権から民主党・社民党・国民新党の連立政権へと政権交代が行われた。その結果、前連立政権がつくった膨大な国や地方の借金は、人気取り政策のため減少するどころかますます増大する結果になった。選挙に勝ちさえすれば、国家や地方の未来、子孫の未来などはどうでもよいという政策は、今日、明日の収入が入ればよい、自分たちの現在の負担さえ少なければよい、後の世はどうなってもよいという国民の欲望と重なり合っている。勝田先生のお教えの通り、誰が考えてもこのままではこの国は滅びる。ギリシャの歴史をもっと学ぶべし。

- 2010 年 4 月 14 日 林明夫記 -